

◆2008年 9月

八木健選「七句」

1. 泡一つ放ちて金魚の答へなり 松井 勉
金魚の答へ・・・言い過ぎないところがいいですねえ
2. 羽音だと気付いた時の蚊の勝利 山口えつこ
蚊の勝利・・・昆虫と対等の立場で作句しているのがいい
3. 朝顔やすぐに数へる癖抜けず 倉方 稔
朝顔や・・・銀行に勤務してウン十年なんですか・・・
4. 人間で言ふなら後期扇風機 山本 賜
後期扇風機・・・仲間意識の灰見えて擬人化っばい
5. 残暑かな徐々に濃くなる妻の髭 山口濤聲
妻の髭・・・あくまで文芸ですから奥様、ご理解を
6. 竹婦人ちやんと名前が付いている 彦阪義久
竹婦人・・・キャパクラの娘と同じ名前だったりして
7. 古時計振子も伸びる暑さかな 高田敏男
古時計・・・誇張がよろしゅおまっせ

青山桂一

手直しは機械に代はる早乙女で
観念すもみじマークや梅雨に入る
夏野菜補強が過ぎて窮屈げ

安藤淑子

骨密度脳密度薄き薄暑かな
揚げ膳の三食有りの夏眠欲し

足立淑子

秋の空つい白黒をつけたがる
菊日和パンダの赤ちゃんをつつむ
秋の蝶長距離バスの客となる

有吉堅二

無月なら無月でよしと集ひけり
敬老日大きな耳の並びをり

後期には高貴な暮し冷奴

釣瓶落し天動説を肯へり

井口寿々子

飯塚ひろし

塀のぼり切り考へるかたつむり
凌霄のはげしさについ後退り
露天風呂足を洗いに鬼やんま

色欲を未だ断ち切れぬ生身魂
大勢の仏抱へて盆用意
魔女の靴並べて置きぬ星祭

池田耕川

井口夏子

落選の故しらされず菊人形
雅なる舞を忘れて夏の蝶
陽を肩にして天竜の水澄まし

飼い主より犬が綱ひく秋うらら
ウエストのゴムの後は食の秋
大酒を飲んで小言の長き夜

稲沢進一

今城夏枝

メロンです一刀両断にて未熟
大漁も不漁もなくて海月かな

卓上のトマト発熱してをりぬ
ふとももを薊の棘にねらはれる
鴉めに狙はれてみる無花果よ

魚田裕之

越前春生

冷房の温度設定決裁印
人妻をしばし脱ぎ去り水着かな

家計簿の小銭の合はぬ良夜かな
釣れぬ日は買った秋刀魚を釣果とし
震災忌枕の下にかくし金

加藤賢

可知豊親

唸る蚊に腕差し出してじつと待つ
夏風邪に治らぬ薬ありにけり
冷房や試飲の効いて出来上る

駆け落ちの昔を語る生身魂
ルビ振つて儂のことぢやと生身魂
プロマイド肌身離さぬ生身魂

金山敦観

倉方稔

昼間とは言葉改め夜学生
燃料の高きに沖の初秋刀魚
産地など地球の裏や新豆腐

日傘見て連れの男を見る妬心
朝顔やすぐに数へる癖抜けず
ビル街の隙間にチラリ大花火

草薙一朗

小杉隆

夏瘦や諭吉一葉英世まで
雪男いづれば季語に河童の忌

苦瓜や叔父はズボンを寝押しせり
ゴキブリの黒ははやりのスーツかも
人妻の握り強きや盆踊

清水吞舟

吊されし猪の残念さうな口
今年また娘に造る梅酒かな
遠花火妻も相似て世に疎し

白井道義

炎天の赤信号を渡る犬
丸々と太り色白夏大根

杉村福郎

片脚をあげて樹の根に蟬の殻
欠伸して言訳むなし敗戦日
物納を縄張として銀やんま

高田敏男

古時計振子も伸びる暑さかな
女子寮の大きな窓や夜這星

高田菲路

吊忍値切れば苔を負けくれし
お花畑燥きて歩板無くもがな
泳ぎっぷりただ者ならず避暑夫人

高橋真紀子

完熟の桃のおしりの皮をむく
敬老日お祝ひをして叱られる
小鳥くる待ち人來ない戸口にも

高橋素子

澄む水の底に光るやお賽銭
夕しばむ槿に言葉喋らせる

田代青山

まぜるな危険まくなぎの中帰る
消火器と隣り合ふなり鰻めし
油虫すぐあやまればすむことを

田代青波

向日葵やうちら陽気な三姉妹
どうも吾を避けをり日傘傾けて
老婆心爺にもありて鳥兜

田中章子

はげ山の隣の山の粧ひけり
玉虫の己の色を知らざりき
稲妻の横に走り妻のごと

谷むつみ

大穴も中穴も無し穴惑ひ
板前の何処に行くや渡り鳥
小判草千両箱に入れにけり

種谷良二

茄子の馬お盆開けには麻婆豆腐
晩夏の夜妻のバックの入念さ
秋灯の下で傀儡真似てみる

飛田正勝

打ち上げを仕舞ふ線香花火かな
敗戦忌貧乏人は米を食ふ
利くだけの新酒に酔ひて仕舞ひけり

永島唯男

鰻重の隅はつつかず爪楊枝
草取をせねばせねばとのぼしをり
また地球つつて釣師は玉の汗

西をさむ

為す事の無くて美言の端居かな
秋来ぬと財布の中を風が吹く

原田曄

知らぬ子と蝉追ふ羽目になつてをり
汗拭ふ吾が影われとバスを待つ

バントック京子

脚美人水着姿の影法師

彦阪義久

竹婦人ちやんと名前が付いている
焼け石に水だと言ひつ水を打つ
やけくその涼しき顔の奴ばかり

日根野聖子

暗がりをかき混ぜてみる踊の手
関節のどこも硬くて茄子の馬
鳴き声といふより読経法師蝉

藤岡蒼樹

楽日の日干しに冴えぬ水芸人
仁丹を目瞑りのむや嬢の目
終戦忌戦前戦中戦後生れ

藤森荘吉

ことごとくこれでいいのだとて残暑
かき氷迷つた挙句レモンかな

堀川亮二

向日葵の陽に向かぬ拗者もあり
雷鳴の近づき焦せり尻たたく
昨日今日装ひ新た七変化

前川敏夫

戯れに本気で応へ鳳仙花
後戻りできぬ覚悟の夜這星
気まぐれの人騒せな穴惑ひ

松井勉

裏口を専用にして蝉移る
泡一つ放ちて金魚の答へなり
岩清水地名美名が付き名水

松下幸子

夏やせを賞められ実はガンなのよ
電文のような子の文冬ぬくし
八十の夫婦揃って用意ドン

三木蒼生

雨男欲しき連夜の猛暑かな
虫愛づる姫君兜虫飼育
俳諧も牛もクローン街酷暑

虫倉蝉音

休肝日妻の忘れる暑さかな
名月も今宵脇役孫来たる
親の肩借りをり子供神輿かな

山口えつこ

不眠症言い訳めいた大昼寝
羽音だと気付いた時の蚊の勝利
釣堀のなかで病葉浮き沈み

山岡冬岳

夜長さを夫戻り来御前様
食ひ意地に負けて夜食の輪に入り
田に畑に派遣案山子の立つてをり

山下正純

一心に木心訳し蝉時雨
午後の径ただ濃緑と蝉時雨
御結びに掛け放題の蝉時雨

山本あかね

茄子の牛胡瓜の馬のどれに母
豆腐屋が踊太鼓を打ちてをり

吉野香風子

湯桶もて前を押さへて御慶かな
初東風や家敷稲荷も正一位
良い所へ行けと雪野に葬らる

山本賜

人間で言ふなら後期扇風機
あやされて上半身の裸んぼ
秋暑し人追ひ払ふロケーション